

現代社会に取り戻す相互主体性・民主主義・平和の連続性
—自由大学の精神を幼児教育に掘り起こす—

城田 美好

明治時代の学制発布後に整備されてきた近代学校は、「教える者」である教師から「教えられる者」である生徒に知識が伝達されるというトップダウン且つ一方通行の「学び」を確立してきた。この「学び」の前提にあるのは、「無知な学生」と「知識豊富な教師」という二項対立図であり、「教える者」と「教えられる者」は権力的な関係性において、その立場性は揺らぐことなく、今日まで発展、強化されてきたのではないだろうか。

このような近代学校における「教える者」と「教えられる者」の固定的な関係の対極に、相互に教え、教えられる流動的な相互主体的関係を基盤に据えた、自由大学の高倉輝と金井正の関係性（学者と市民の学び合う関係）、山越脩蔵と猪坂直一の関係性（民衆間の学び合う関係）が浮かび上がる。集団において関わり合う自己と他者は、共に教育者であると同時に被教育者であり、対話や議論の過程で立場は常に逆転し流動的であるからこそ、人と人の間に学びが生まれ、問と答えの間に教育が生まれるのである。私は、この学びのあり方に民主主義の根幹を見出し、自由大学における集団性と人間同士を類的存在として受け止め合う関係構築過程に平和の基礎を知覚した。

今日私が自由大学に見出している、相互主体性—民主主義—平和の連続性は、自由大学特有の当時限定の産物であったのかと問われれば、答えは否である。確かに、上述のように近年の学校教育における学びのあり方には、疑問を感じずにはいられないが、義務教育課程以前の幼児教育はどうであろうか。私は、集団性を重んじ、人とのつながりと関係性の中でこそ、人が育つことを前提とする保育に自由大学の集団性を重ねている。加えて、幼児教育における子どもと保護者を類的存在として、今この瞬間共にあろうとする権力性を意識した保育者の姿に、高倉輝や土田杏村の面影を重ねており、私は保育に相互主体性—民主主義—平和の連続性を見出さずにはいられないのである。

去年開催された、自由大学運動 100 周年記念集会において早稲田大学名誉教授、大槻宏樹先生、長野大学名誉教授、長島伸一先生、そして自由大学研究者の山野晴雄さん等が、口をそろえて「自由大学の精神は脈々と現代に生きている」とおっしゃっていたが、その水脈はどこにあるのか。彼らが言うところの「現代」が指し示す、水脈のありかを探すべく、私は「保育」を掘り下げているところだ。

今回の発表では、自由大学の精神として私を魅了する「相互主体性—民主主義—平和の連続性」について、どのように 3 項が結びつき、その連続性を「現代」の何に見出し、実際に活動しているのかを具体的に述べることにする。

自由大学が私に課した地図を片手に現代を生き、その水脈を掘り当てる—過程を共有する時間として本発表を位置づける。

〈学校教育〉という近代的価値観をときほぐす

佐々木 七美

わたしと自由大学の出会いは、偶然学部時代の図書館で見つけた宮坂広作の『近代日本社会教育史の研究』（法政大学出版局、1968年）から始まった。学校制度によらず民衆の手によって教育・学習機関を作り上げたという叙述にわたしは驚きを隠せなかった。そして、その人びとによる運動にエンパワメントされたのであった。この22歳のときの衝撃は、わたしにとって「学校」という存在が、強い〈規範〉を持った絶対的なものであったことを意味していた。

わたしたちにとって学校や教育の経験といったものはどのような存在であるのだろうか。

「学校教育」は、近代日本のあゆみとともに始まり、子どもは学校に通い学ぶもの、通わせ学ばせるものといった価値観は次第に身体化されていった。子どもとその家族にとって、「学校」や「教育」は生活の一部となり、彼らの生き方を大きく規定するようになった。

親は我が子の立身出世を願い、子どもは親への恩に報い、期待に添いたい一心から学歴や知識の上昇に粉骨砕身した。そこには、成功のうらにさまざまな挫折の経験といったそれぞれのストーリーが存在する。

学校では、学ぶべき内容が規定され、教師と生徒という厳しい上下師弟関係のなかで〈修養〉が求められた。子どもたちは、学力の成績というものさしで優と可に振り分けられ、競争を強いられるのが日常であった。

このように多くの子どもたちが、学校や教育、その延長線上にある社会、そして家族の思いにがんじがらめになりながら思春期のひとときを過ごしてきたのである。この教育をめぐる感覚といったものは、この100年を回顧した際にどれだけ変容してきたといえるだろうか。いま一度立ち止まって、自身の〈教育経験〉をふりかえり見つめ直す必要があると考える。

近代日本の「学校」、「教育」の歴史をとらえかえす際に、自由大学に集った青年たちの思いや実践は重要なピースとなりえるだろう。

本報告では、上記の問題関心に即して、近代日本における「教育」という〈規範〉を解きほぐすことを試みる。まず、中等教育／高等教育機関間の学びの乖離という点に着目し、(1) 教育と学問、(2) 歴史学と歴史教育という論点から議論を行う。そして、視点を大正期の上田自由大学にもどし、上田自由大学において専任理事を務めた農村青年である(3) 猪坂直一の〈教育経験〉について考え、言及していく。

自由大学が上田の地に誕生して100年間の近代学校、教育のあゆみについて現在と過去を行き来しながら振り返ることを皆さんと共にしていきたい。

学び手と教え手、双方の視点から捉えた教育的関係性

小池 貴博

大学院で理論物理学を学んだのち、私は黒板に向かう「学び手」から一転し、教師として黒板を背に「教え手」となる。日々の教育実践において「学び手」と関わり合う中で、「学問を学ぶ意義とは何なのか」「一人の大人として、未来を担う子ども達に何を託していけるのか」といった問いについて考えるようになる。これらの問いに正対するべく、日本の伝統芸能などの「わざ」の継承における師弟関係にその活路を見出す。そのような模索の中で、自由大学研究者・米山光儀氏と出会い、上田自由大学運動を知ることになる。

このことをきっかけに、昨年度のフォーラムへ参加。故郷であるこの上田の地に、かつて自らの手で学びの道を切り拓いてきた人々がいたことに感銘を受けると共に、そこに関わっていた人々の教育的関係性を捉えたいと考えるようになる。

本発表では、この自由大学運動における教育的関係性を、「学び手」と「教え手」という2つの視点に立って捉えることを試みる。「学び手」としては自由大学運動の前身である哲学講習会の開催を主導した金井正、「教え手」としては「被教育者本位の教育」の実現を目指したタカクラ・テルを取り上げる。両者の「学び観」や「教育観」と、現代におけるそれらを照らし合わせながら、自由大学運動における教育的関係性を捉え直す。

また、今年度のフォーラム実施にあたり、私は母校である上田市立北小学校にて出前講座を行った。同校は10年ほど前からコミュニティスクールとして、子どもと教師だけでなく、保護者や地域の方も共に学び合う実践を積み重ねている。私は出前講座に向け、「自由大学運動の理念や精神を継承していくこと」の意義を伝える準備をする中で、その意義を直接的に伝えることだけが継承に繋がるのだろうか、とも考えるようになっていった。この出前講座の実践の様子も併せて報告する。

上田自由大学運動からおよそ100年が経つ。現代に生きる私たちは、自由大学運動に関わっていた先達の理念や精神を本当の意味で継承することができているのだろうか。自由大学運動の「過去」から学び、「未来」へと橋渡しをするためには、「自由大学運動」から再び「自由大学」へと動き出す一歩が必要であると考えている。本発表の最後には、「自由大学」の「未来」に向けた提言を試みる。

上田自由大学と地域博物館

栗山 究

地域博物館をご存知でしょうか。人びとが地域に向き合いさまざまな学術や芸術の活動を行うことのできる学びあいの場所のことです。この考えを理論化したのが1947年生まれ、神奈川県横浜市出身の博物館研究者・伊藤寿朗さんです（1991年亡くなる）。パン職人でもあった彼の理論化を支えた主な舞台は同県の平塚市にあります。彼の理論は同市の学芸員とともに平塚市博物館という1976年に開館した公立の地域博物館づくりに大きな影響を与えます。地域博物館の考えは茅ヶ崎市や相模原市など近隣自治体の市民に影響を与え1970年代～1990年代、公立の地域博物館を創る運動を創りだしました。

私は学生時代の2000年代、平塚市博物館で市民が相互に学芸活動を展開している場への参加により、この指とまれ方式で集う老若男女が学芸員の支援を得ながら地域の調査研究に励んでいる—学校教育でも体験し得なかった—学びあいの空間に衝撃を受けました。以来、地域博物館という場の存在そのものが、どのような歴史的経験を経て生成しているのかをたずねる旅が始まりました。

伊藤さんの経験に即しこの歴史的ルーツをたどると、その舞台は戦後直後から1960年代に展開した豊橋向山天文台という愛知県豊橋市にあった私設の児童館実践に逢着します。地域を舞台にこの拠点を運営したのが社会教育・博物館実践者である金子功さんでした（1918年生まれ、2009年亡くなる）。1968年、法政大学の学生であった伊藤さんは金子さんの実践の出会いをきっかけに社会教育・博物館のあり方を本格的に研究し始めます。この過程で伊藤さんは、大阪府枚方市での市民の社会教育運動、図書館職員が地域住民とともに創る公共図書館づくり、そして長野県上田市の上田自由大学運動に関心を寄せます。1969年、伊藤さんたちは上田市を訪問します。そこで伊藤さんが見たものは、上田自由大学運動の経験をもつ市民の公立博物館を創る動きとその失敗の経験でした。

上田市での伊藤さんの経験は、後の地域博物館という考えの理論化に向けた原動力になっていきます。地域博物館という考えの原点を伊藤さんたちに提供した金子さんの実践においても、上田自由大学運動はその考えの下地にありました。では伊藤さんが1969年、上田市を訪問して見て学んだものはなんであったのでしょうか。当日は会場のみなさまとこのことをともに語りあいながら考えていきたいと思えます。